

歴史の限界と多文化主義 「歴史」をめぐるアボリジニとの対話

保苅実*

1. 歴史の相対性について

「歴史とは何か」という問いが、あらためて議論されて久しい。目的論や史実性を基礎にした「歴史」を19世紀西洋の発明として歴史化する作業は、フーコーに多くを負っていることは言うまでもない。だがその後、いわゆる言語論的転回が歴史家に突きつけた問いは、「歴史とは何か」というよりは、むしろ「そもそも歴史研究は可能なのか」であった。ポスト構造主義の諸理論は、歴史家が過去を探索し構築することは根源的に不可能であり、「歴史とはいつでも言説的な形態でしか私たちの前に姿をあらわさない」と主張したからである。こうして現実的とは言説的と同意になり、それゆえ歴史と文学の境界があいまいになった。

また「歴史とは過去を理解するための数ある様式のひとつに過ぎない」とする主張は、何も目新しいものではない。例えばその古典的な研究として、レヴィ・ストロースやエリアーデを挙げることができる。神話は、歴史意識とは異なる仕方で過去を構成する。こうしたいわば「歴史と神話」論の特徴は、神話を歴史よりも劣った様式であるとは認めず、歴史と神話とは文化的・歴史的に異なる起源をもつ、異なる過去の構成法であると主張する点にある。

あるいは近年盛んな「歴史と記憶」論も、歴史を相対化しようとするもう一つの試みであるといえる。ここでは「歴史」のかわりに「記憶」が過去を探索するための異なるアプローチとして強調される。方法は様々である。ピエール・ノラのように記憶と歴史を対立概念として示す場合が多いが、歴史を記憶の様式と規定する者もいる。あるいは歴史と記憶の相互依存関係を強調する議論もある。い

ずれにせよ、記憶をめぐる諸理論によって、歴史の普遍性にあらためて疑問が投げかけられたことは疑いえない。

だが、以上みてきたように、歴史の相対化が近年盛んに議論されているにもかかわらず、普遍的で優等生的な「よい歴史」を志向する歴史学の伝統はゆるぎなく保持されている。まずポストモダニズムの挑戦は、厳然たる「史実」と「真実」のまえに挫折した。「ホロコーストはなかった」あるいは「南京虐殺はなかった」とする歴史修正主義者の主張が認められないのは、結局歴史家が「言説」よりも「史実」を優先するからである。あるいは歴史に記憶や神話を対置したところで、学究としての〈歴史の普遍性〉は依然として無傷のままである。つまり、神話や記憶の研究は、歴史以外の何かを研究しているというまさにその理由によって、歴史学を脅かす存在にはならない。「歴史」は依然として歴史学者によって独占され、ディシプリンとしての〈西洋性 = 普遍性〉をいかに発揮している。

私は「神話」や「記憶」といったオルターナティブを示すことで、歴史のみせかけの相対性を誇張すべきではない、と考える。なぜなら、これではアカデミックな歴史の西洋近代性 (= 普遍性) に何の影響もあたえないだけではなく、ややもするとそれを隠蔽しかねないからである。本稿の目的は、神話や記憶と同様、歴史もまたあらゆる社会文化に存在している可能性を示し、西洋出自のアカデミックな歴史 (普遍的な「よい歴史」) と歴史学が受け入れられない歴史 (普遍化を拒否する「危険な歴史」) とのあいだで対話をうながす可能性を模索することにある。

私は、オーストラリアのノーザンテリトリー (北部準州) において、主にグリーンジとよばれるアボリジニの人々が暮らすコミュニティで、オーラルヒストリーの聞き取り調査をおこなった。コミュニティ滞在中、グリーンジの歴史家たちは、オーストラリア植民地史に関する歴史物語を筆者に語ってくれた。それ

* 日本学術振興会特別研究員

は「植民地史」であって、アボリジニの神話ではない。にもかかわらず、グリーンジの歴史物語は、決してアカデミックな歴史学者が歓迎するような「よい歴史」ではない。以下この点を、「地方化された歴史」と「ポスト世俗主義」という二つの視座で検討していく。

2. 地方化された歴史

いわゆる「地方史(local history)」は、ここで扱う「地方化された歴史(localized history)」ではない。地方史とは、つまり地域社会についての歴史であって、それは歴史学の普遍性を揺るがす存在ではない。地方史は、歴史学者が営む<普遍的な>歴史空間に還元可能である。一方、「地方化された歴史」という名で私が示そうと考えているのは、特定の地域社会の文脈では意味をなしていても、普遍化を志向する歴史学者には「間違った歴史」にみえてしまう歴史、つまり、普遍的な歴史空間に還元不可能な歴史をさす。

私がオーラルヒストリー収集のための調査をしているあいだ、グリーンジ・カントリーに暮らす人々は、異口同音にオーストラリア植民地化の最初期の段階でキャプテン・クックがグリーンジのカントリーに現われ、アボリジニをライフルで撃ち殺したと証言した。あらかじめはっきりさせておきたいのは、学術的歴史学にとって、キャプテン・クック(ジェームズ・クック船長)がエンデバー号に乗って一七七〇年にオーストラリアを「発見」したのは、オーストラリア東海岸であり、グリーンジのカントリーが位置する北オーストラリア内陸部へ出かけていったという「史実・事実」は存在しないことである。

長老の一人、ジミー・マンガヤリは次のように語った。

キャプテン・クック、あいつがやってきた。彼はこのカントリーにやってきて白人をあちこちにおいていった。我々はけっしてそんなことはしない。それはよくないことだ。・・・なあ、キャプテン・クックは悪いことをした。あいつはアボリジニの人々

を撃ち殺し、女を盗んだ。我々はけっしてそんなことはしない。そんなことをするのは白人だけだ。

ここにアカデミックな歴史学者の耳にとどかないサバルタンの語り、つまり「危険な歴史」がある。キャプテン・クックがグリーンジのカントリーにやってきてアボリジニを撃ち殺したという歴史は、それが「史実」に基づかないがために、歴史学者が産出する普遍的歴史空間に迎え入れられることはない。では、このグリーンジの人々が営む歴史実践、歴史家としてのグリーンジが展開するオーストラリア植民地史分析は「間違った歴史」なのだろうか？

ある歴史がアカデミックな普遍的歴史空間に参加していないことは、その歴史が「間違っている」ことを必ずしも意味しないはずである。グリーンジの人々が語る植民地史、それはグリーンジ・カントリーにおいて地方化されたオーストラリア史なのであって、そもそも普遍化されることを意図してはいない。これはなにもグリーンジの人々に限ったことではない。キャプテン・クックの歴史物語は、北部オーストラリア各地のアボリジニたちによって、それぞれのカントリーに地方化されているのである。

このようなアボリジニの人々による歴史実践が我々に突きつけているのは、歴史世界の根源的多元性であり、普遍化に取り憑かれたアカデミックな歴史空間の限界である。こうした「危険な歴史」を「間違った歴史」として排除することは、アカデミックな知の権力が世界にひろがる多元的な歴史空間を植民地化してゆく営み以外の何ものでもない。この点に関して、デボラ・ローズの指摘は重要である。

[アボリジニによるキャプテン・クックの物語は]キャプテン・クックの航海に関する西洋の知識からは奇妙にみえる。しかしより興味深いのは、こうした差異が重要で

はないという点である。侵略は確かに起こったのであり、人々は確かに撃ち殺されたのであり、彼らのカントリーは確かに盗まれたのだ。この「アボリジニの」物語を聞こうとしない者だけが、「白人とアボリジニとのあいだの」キャプテン・クックの物語の差異をことさらに問題視するのである。

ここに、サバルタン研究で有名な、ガヤトリ・スピヴァクが訴える次の言葉、「自ら学び知った特権をわざと忘れ去ってみる」ための契機をみいだすことはできないだろうか。学び知った知識人であるアカデミックな歴史学者は、キャプテン・クックがグリーンジのカントリーに出現しなかったことを「知っている」。この「知っている」という特権を「わざと忘れ去って」みない限り、多元的歴史空間にアカデミックな歴史叙述が自らを開いていく可能性は閉ざされたままである。

この問題をさらに掘り下げる前に、学術的歴史学が直面するもう一つの歴史の限界を検討したい。それは、歴史物語に登場する超自然的存在についてである。

3. ポスト・セキュラリズム（ポスト世俗主義）

グリーンジのカントリーの大部分は、1880年代に設立されたノーザンテリトリー最大級の牧場（ウェーブヒル牧場）の一部となった。入植初期の白人による殺害をまぬがれたグリーンジの多くは、劣悪な労働条件のもと、ウェーブヒル牧場でストックワーク（牧場労働）に従事することになる。

ところで、このウェーブヒル牧場は、1924年2月に起こった大洪水で一度完全に破壊されたことがある。当時の新聞やその他の報告は、洪水の被害については報告しているが、洪水が起こった原因についての説明はない。それはもちろん大量の降雨があったからであるが、いったいなぜこの特定の年に、この特定の場所で大量の降雨があったのだろうか？グリーンジの人々はこの問いに対する回答をも

っている。そこで、私が聞き取ったグリーンジの説明をまとめた。

この年、それまでまとまった雨がほとんど降らず、ウェーブヒル牧場の牛や馬たちは牧草がなくなって困っていた。そこで雨を降らせる能力をもったディンガ という名のグリーンジの長老は、大雨を降らす決心をした。雨を降らせるためには「レインストーン（水晶）」が必要となる。彼は、雨をつかさどる大蛇が暮らす湖に潜ると、この大蛇を見つけだした。ディンガは、レインストーンを大蛇に渡すと大雨を降らせるよう依頼したのである。その翌日から数日間、グリーンジ・カントリーに雨が降り続いた。ディンガは、牛を助けるために雨を降らせたのだが、結局は牛を洪水で流してしまったのである。

このグリーンジによるウェーブヒル牧場の洪水に関する歴史も、学術的歴史実践に生きる歴史学者を大いに戸惑わせるはずである。なぜなら、「一九二四年にウェーブヒル牧場で起こった洪水は、アボリジニの男性がレインストーンを使って降雨を引き起こしたためである」とする歴史解釈、つまり超自然的な現象を基礎にした歴史分析は、アカデミックな歴史学では許されないからである。そこでアカデミックな歴史家は、雨の大蛇という話をグリーンジの「信仰」だとして人類学的に解釈してしまい、グリーンジの「危険な歴史」を「よい歴史」を書きかえてしまう。しかし、人類学的解釈をどんなにおこなっても、大蛇が雨を降らしたことを研究者が信じ（ようと）はし）ないことには変わりはない。つまりここでも、学術的歴史学は、自らの普遍性に固執せざるをえないがために、その限界に直面するのである。

これは^{セキュラリズム}世俗主義の限界にかかわる問題である。ディペッシュ・チャクラバルティは、歴史化という作業に密接にかかわってきた「世界の脱魔術化」は、世界を支配する唯一の原理ではない、と主張する。つまり、アカデミックな歴史家であっても、世俗的で均質な歴史時間とは異なる、神や精霊が行為する時空

にもその身を同時において生きているのである。つまりここで重要なのは、アボリジニだけでなくわれわれも含めて、人間の思考や活動にとって、超自然的存在は過去のものではないという点である。

学術的歴史学は、たしかに超自然的存在を記述する言語をもたない。しかしその一方で、超自然的存在はグリーンジと同様に我々の生活世界にとって身近である。西洋近代の〈普遍化〉が要請する世俗的時間意識と、普遍化不可能な超自然的時間意識は、グリーンジだけではなく、我々自身の生活実践のうちに同時に存在している。であるならば、こうした超自然的な「危険な歴史」と西洋近代の〈普遍的〉歴史学が相互に排除しあったとしても、それは「ギャップごしのコミュニケーション (communication over the gap)」が不可能であることを意味しないはずである。

これは、歴史叙述における「ポスト・セキュラリズム (post-secularism)」の可能性を示唆している。ポスト・セキュラリズムは、宗教哲学や神学の分野で使われはじめている概念であるが、ここではさしあたり、近代社会が促進した公共世界の世俗化というポリティックスの限界を探るためのアプローチとしてこの概念を使いたい。ここで要請されている態度は、グリーンジやサンタルの超自然的な歴史をいわゆる「ニューエイジ運動」のごとくそのまま〈普遍的〉歴史空間に取り込むことを意味していない。そうではなく、グリーンジの歴史を普遍化 (= 世俗化) せざるをえない意識と、普遍化を拒んで歴史世界の多元性を引き受ける意識とを同時に保ちながら歴史叙述をおこなう態度である。

グリーンジの大蛇の歴史物語に関して言えば、我々は一方で、彼らのオーラルヒストリーを〈普遍化 = 世俗化〉することができる。つまり、この歴史物語をつうじて植民地権力構造を分析しようとするグリーンジの意図を見出すことができる。グリーンジの人々は、白人には及びもつかない能力をもっていることを示すことで、白人の入植以降に経験してきた植民地主義的な権力構造に対する転倒作業をおこ

なっていると解釈・分析することができる。しかしその一方で、アボリジニが大蛇を使って大雨を降らせたという「危険な歴史」を〈普遍化を拒否する歴史〉として、無毒化せずにそのまま引き受ける態度も同時に求められている。この二つの歴史叙述を矛盾しつつも同時に行なうこと。つまり、ギャップを承認しつつもコミュニケーションの可能性を放棄しない態度が求められている。

4. クロス・カルチュラライジング・ヒストリー

重要なのは、アカデミックな歴史がそれ以外の歴史を〈普遍化〉しようとする際の限界に留意し、多元的歴史世界において相互の〈交渉・共存〉をうながすような歴史叙述の方法をみいだすことにある。これを「クロス・カルチュラライジング・ヒストリー (cross-culturalizing history)」の企てと呼びたい。

歴史の本流から排除されてきたマイノリティたちが歴史表象の表舞台に登場し、アカデミックな歴史叙述の「多文化化」が唱えられて久しい。だが、「よい歴史」の範囲内で営まれる歴史の多文化主義は、アカデミックな知の権力構造を不可視に温存する「コスメティック・マルチカルチュラリズム (うわべの多文化主義)」を生み出しかねない。文化史や社会史が、マイノリティもふくむ歴史の複雑さに基礎づけられた叙述をどんなに試みても、「歴史」そのものが支配的文化に条件づけられている点が根源的に問い直されない限り、〈歴史の語り〉をめぐる権力作用に十分な批判を加えたことにはならない。

クロス・カルチュラライジング・ヒストリーというプログラムが試みようとしているのは、ギャップごしのコミュニケーションを通じて、多様な歴史理解が共有されてゆく可能性にかける、いわば新たな歴史経験論である。あたりまえであるが、次の点を確認しておきたい。グリーンジの人々は、「実際にあった歴史」としてキャプテン・クックのオーストラリア侵略や大蛇による洪水を語っているので

あって、ポストモダニストのように言説の差異のシステムとして語っているわけではないのである。

ところで、「あなたは『グリーンジの歴史』なるものを本質化し、アカデミックな歴史叙述との二項対立関係をことさらに固定化していないか」という、十分に予想される批判に対して、ここで二重の回答を与えておくことは蛇足ではあるまい。第一に、戦略的本質主義について。私が歴史を学んだグリーンジの長老たちは、「我々グリーンジの物語」を「彼ら白人たち」がいつこうに聞こうとしないことを繰り返し批判していた。その上で、彼らが「『我々の物語』をオーストラリアだけでなく日本の人々にも伝えて欲しい」と私に語ったとき、グリーンジの長老たちの期待は、私が学んだグリーンジの歴史物語を「反植民地主義的言説(counter-colonial discourse)」として(のみ)扱うのではなく、「実際にあった歴史」として物語ることであるはずだ。これはつまり、「アボリジニの法は、白人の法とはちがう」として自分たちを本質化するグリーンジの人々を「啓蒙主義的に脱構築する」ことをサスペンドする態度の要請なのである。

だがこうした態度は、私が親密なつきあいをしたグリーンジの男性長老たちを特権化してしまう危険をはらんでいる。ここで、ハイブリッド性に関する第二の回答が不可欠となる。学校教育を受けたことのない男性長老を中心に教わった歴史物語が、「グリーンジの歴史」として全体化・固定化され、例えばグリーンジ・カントリーに暮らす女性や若者の歴史の語りを抑圧している可能性はないか。より具体的には、近い将来にグリーンジの若者が高等教育を受け、授業でキャプテン・クックがオーストラリア大陸東海岸を「発見」したことを学び知り、グリーンジの歴史が「ハイブリッド化」されていく契機を私は無視していないだろうか？この批判に対して、私はまずグリーンジの植民地史分析は、その定義上、既に/常にハイブリッドであることを強調したい。西洋近代がもたらした知識や事物の流入なく

して、グリーンジの歴史物語に「キャプテン・クック」や「ウェーブヒル牧場」が登場する余地はない。さらに、グリーンジの若者が高等教育を受けて〈普遍的〉歴史学を学んでゆくこともおおいにありえることであり、実際アカデミックな舞台で活躍するアボリジニの歴史家は年々増加している。つまり、グリーンジをはじめ、オーストラリア先住民社会のハイブリッド化は着実に進行しているのであって、それが望ましいか望ましくないかはグリーンジでもアボリジニでもない私が論じる課題ではない。将来、グリーンジ・カントリーにおいて、キャプテン・クックが1770年にオーストラリア東海岸を「発見」したとする歴史が、キャプテン・クックがグリーンジを撃ち殺したとする歴史を「排除」するのか、それとも双方が「共奏」するのか、それは私にはわからない。

むしろこのハイブリッド性に関して私が注意を喚起したいのは、こうした歴史実践のハイブリッド化が、かくも一方向にのみ進行していることの問題性である。西洋近代の絶え間ない流入によって、グリーンジをはじめアボリジニの歴史実践がどんどんハイブリッド化しているにもかかわらず、先住民/少数民族のエージェンシー(主体性)を声高に訴えてきたはずの「リベラルで民主主義的」な歴史学のディシプリンは、いつこうにハイブリッド化されていない。これは、アカデミックな知の産出構造、そしてそれと共犯関係にあるグローバルかつナショナルな政治経済構造が再生産し続けている権力作用を問題としなければ説明がつかない。だから、コスメティック・マルティカルチュラリズム批判の射程は、アカデミックな知の権力にとどまらず、それを温存・強化しているグローバルかつナショナルな政治経済体制へと向かわざるをえないのである。

ここであらためて自問すべきは、なぜ我々は、キャプテン・クックの侵略や大蛇による洪水の歴史を(信じることができないとしても)一定の範囲で理解することができるのか、という問いである。グリーンジの歴史家は、例

えば「キャプテン・クックが月にでかけて行ってサーフィンをした」とは言っていない。そうではなく「キャプテン・クックがグリーンジ・カントリーにやってきてアボリジニを撃ち殺した」ことを主張している。歴史学者はいかなる意味でも前者の語りを理解することができない。それは、経験的に紡ぎだされた「歴史への真摯さ」として接続可能性をみいだせる余地がみあたらないからである。しかしローズが指摘したように、後者の語りは、我々が理解するオーストラリアの植民地史とのあいだで関係を取りむすぶことができる。学術的歴史実践における「真摯さ」においても、オーストラリア侵略は起こり、アボリジニは殺されたのである。同様に、大蛇が洪水を起こしたという歴史は、超自然的世界が我々の「生活世界」において異質でないという意味で、やはり荒唐無稽とはいえない。つまり、「よい歴史」と「危険な歴史」とのあいだには、根源的なギャップがあるにもかかわらず、我々はグリーンジの語る歴史に「歴史への真摯さ」をみいだすことができる。これは、ひとえにグリーンジの語る歴史が「経験的(experiential)」に紡ぎだされたからなのではなかろうか？

「歴史の真実(historical truth)」との対比で「歴史への真摯さ(historical truthfulness)」への注目・シフトを訴えているのは、テッサ・モーリス スズキである。モーリス スズキは、「歴史の真実」は一般に歴史家が接近して記述することが可能な「外的な」客観的存在であると想定されているが、これは錯覚であると主張する。ただし、こうした錯覚が生まれるのは、歴史の真実が存在しないからではなく、むしろ歴史の真実が無尽蔵にあるからなのである。その一方で、「歴史への真摯さ」は、歴史を探索する主体と探索される客体との関係性のうちにある。つまりここでは、歴史家が無尽蔵な歴史的真実にむかう際のプロセスに重点がシフトしているのであり、必然的に過去に接近しようとしている歴史家自身

のポジション、歴史家がもっている^{バイアス}偏見に最大の注意を払う必要が生まれる。

私が、多元的歴史世界のコミュニケーションの可能性にかけるのは、この「歴史への真摯さ」をめぐるプロセスの交渉や共奏が「危険な歴史」とのあいだで不可能ではないと思えるからである。「経験(的事実)」と「真実」とを結びつけるプロセスは、実証主義的な学術的歴史学とグリーンジの歴史実践とのあいだで異なっているのだが、とはいえ双方とも言説ではなく「実際にあったこと」を問題としている点では一致している。つまり、グリーンジの歴史実践は、近代実証主義的な経験論とは異なる仕方で「歴史への真摯さ」を紡ぎだしているということができる。グリーンジ・カントリーで営まれている「地方化され」「超自然的存在に溢れた」歴史分析において、大蛇もクックも「経験的な歴史への真摯さ」のうちにある。この「経験的に真摯」であるという特徴こそが、グリーンジの「危険な歴史」が、ホロコースト否定論者が営む「間違った歴史」と根本的に異なる点である。というのも、歴史修正主義者たちが、多元的なコミュニケーションを求めてはならず、むしろ自分たちの「歴史的真実(虚実)」を排除的に普遍化しようとするコロニアルな欲望に基礎づけられているのに対し、グリーンジの歴史があくまでもローカルな文脈において歴史の多元性と共奏を基礎に営まれ、相互的交渉関係のなかで立ち現われてくるからである。「歴史の真実」は、しばしば閉鎖的で排他的になる。しかし「歴史への真摯さ」は、他者に対して開かれている、ということもできる。双方向的なハイブリッド化、あるいは多元的世界のコミュニケーションについて、グリーンジの長老ミック・ランギアリは、私に次のように語ったことがある。

そう、アボリジニのやり方と白人のやり方を両方学ぶべきだ。世界のどこから来た者であっても、共に暮らし、共に働くべきだ。

これはとても困難ではある。でも少しずつ、
お互いを理解しあってゆけばいい。

まとめよう。アカデミックな歴史学は、「危険な歴史」が突きつける〈経験的な歴史への真摯さ〉と交渉関係にはいるべきである。もちろん、西洋出自の〈普遍的〉歴史学を否定することがその目的ではない。歴史学者は、この〈普遍性=西洋近代〉にあまりに多くを負っているのであり、そこから逃れたふりをすべきではない。だがもはやそこに安住するわけにもいくまい。であるならば、この普遍的歴史学から逃れられないがために遭遇する「歴史の限界」を隠蔽せず、それをあからさまに物語る事がまずもって重要なのであるまいか。

日本やオーストラリアの先住民族の権利にかかわる市民運動についても、私は同じようなポジションに立とうと考えている。つまり、先住民族の諸権利を国連や市民社会に訴えていく活動をわたしは全面的に支持したい。それ自体を「本質主義は良くない」などといって相対化するつもりは、毛頭ない。ただ、例えば「基本的人権の要求」といった「近代の普遍主義」の枠組みに乗っ取って行われる市民運動の目標が、仮に100%実現したとしても、それは、必ずしも理想的な世界の実現にはならないだろうと考えるのだ。市民運動を支持しながら、その限界についても、問題意識をもち続けていきたい。

さいごに、「歴史」の重要性についてグリンジの長老ジミー・マンガヤリが私に語った言葉を紹介しようと思う。

歴史を殺しちゃいけない。そんなことしたら、歴史がお前を殺すぞ。

ジミー爺さんにとって、「歴史」は「過去の物語」ではない。それは、文字通りの意味で「生きていて」われわれの現在を「監視」している。「歴史を殺す」とか「歴史が殺す」というのは、メタファーではないので

ある。それゆえ、「歴史への真摯さ」において、ジミー爺さんの語りは、「かれらの歴史観として尊重しましょう」といった枠を超え出る必要がある。繰り返すが、これは、たとえ話ではない。われわれは、ジミー爺さんのメッセージを「尊重」したり「解釈」したりするのではなく、文字通りに受けとめることができるのだろうか？

歴史を殺しちゃいけない。そんなことしたら、歴史がお前を殺すぞ。